

## 《研究ノート》

# 井戸はどうして埋められたのか（土器を入れる）

久世 康博

## 1 はじめに

井戸から土器が出土する例はよくあるといえ、その多くは土器の廃棄に伴うことが多い。しかし少ないながらも、特異な様相をもって検出されることがある<sup>(1)</sup>。本稿ではこうした土器の出土状況から、多様な角度から検討してみたいように思うものである。但し、土器で作った井戸枠については除外する。

井戸から土器が出土するとき、どのようにして入ったのか末永雅雄氏が「①意識的埋蔵—これには井戸の神に対する信仰がある。②湧水濾過の為に礫石や木炭の間に充塞する土器片。③偶然に使用の土器や他の器具などを井戸に流し込んだ場合。④井戸廃棄の際土砂とともに投棄したものの<sup>(2)</sup>」の場合があると指摘する。

基本的な分類としては、このような考え方に尽きるかと思われる。そしてまた、井戸に「土器を入れる」とは、どういう状態を指しているのか。②は明らかに井戸の施設として造られたと見なすことが出来、調査の過程でも認識することが出来る。同時に、③の「落下」は判然としないが、量的な側面で判定することも可能である。④の「廃棄するための穴」については、①との混乱が考えられる。これを避けるため、次のように定義してみたい。まず、完形の土器が単数あるいは複数個出土する。復元したときに、完形になった場合も同様と考える。それが正位で据えられたような状態であれば、なお可である。または出土する土器が破片を主体としていても、散乱した状態ではなく一定のブロックごとに分けられる、いっばいに詰まったような状態であるなど、何らかの意図が見出せるような状況であれば本稿の趣旨に合うものとする。このような観点から、本稿では主として、①を念頭においてデータの収集に当たった。

## 2 土器を納入する形態

井戸およびそれに関連する遺構から、土器が出土するパターン別に例示することにしよう。

井戸枠内に土器を入れる（図1） このタイプの埋納法は比較的多く認められる。出土した部位によって、それぞれ例示しておくこととする。

例1 千葉県・富津市川島遺跡SE01<sup>(3)</sup>は、楕円形の井戸（径2.0～2.4m、深さ1.3m）で、出土する土器（図1-1～3）から、古代（9世紀前後か）に埋まったようである。井戸の構造については、抜き取られたか素掘なのか不明であるが、検出面から1.2mまで土坑状の掘込が認められる。この掘込から多くの遺物が出土しているため、土器などの投棄土坑と考えられている。しかし掘込の底部付近からは完形の須恵器壺（図1-3）が出土している。このことは偶然に完形

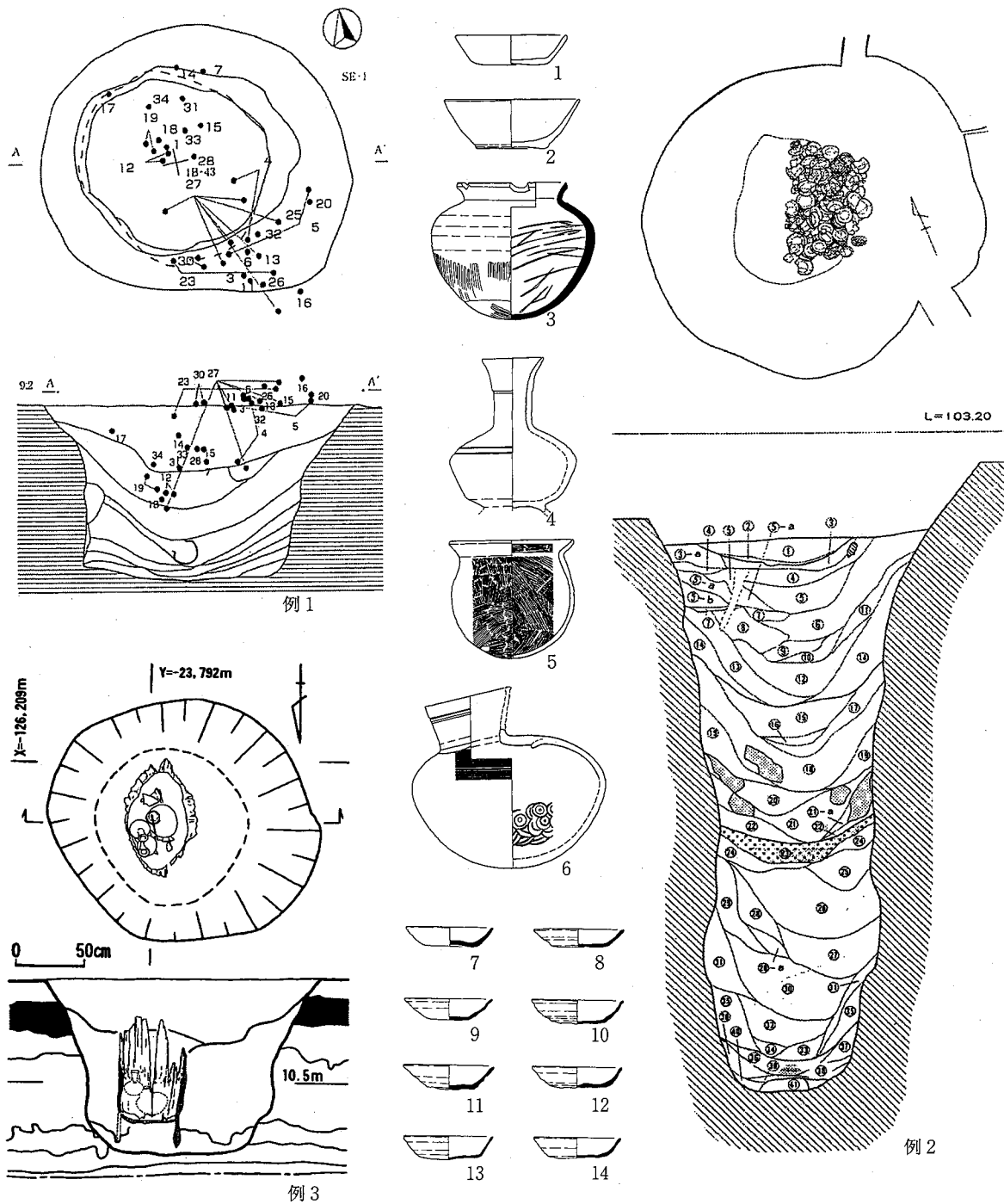


図1 土器を入れた井戸 (1) 例1~3は原図を改変 遺構 (1/50) 遺物 (1/8)

品として残ったと考えるよりも、完全に埋めてしまう直前にまず最初に意図的に埋納したのではないかと推定することも可能である。

例2 滋賀県・矢倉口遺跡<sup>(4)</sup>SE06は、円形の素掘井戸(径2.4m、深さ4.5m)で、最終的には中世に埋まったものである。中下位あたりに植物遺体堆積層があるため、この井戸は使われなくなっても一定期間開口していたものと思われる。その上層には、土師器杯が120枚以上何れも正位で検出されている。最下層には、完形の須恵器(壺)を立位で据えており、その横に銭貨20枚を並

べていたことが報告されている。この井戸が埋められた時期は出土する土器（図1-7~14）から、8世紀後半~9世紀中頃である。同遺跡のSE05も同様の様相を示している。

例3 京都府・内里八丁遺跡井戸<sup>(5)</sup>は、円形の掘形（径1.8~2.0m、深さ1.3m）で、丸太刳貫の井戸枠で内法は45~75cmである。この井戸の底部から、ほぼ完形の須恵器の長頸瓶1、平瓶2土師器小杯1や櫛、桃種が出土している。土器類はいずれも口縁部を上にしており、大きいほうの平瓶の口縁には、ちょうど蓋をするような形に小杯が上向きに乗っていた（図1-4~6）。井戸が埋められたのは奈良時代と考えられる。

例1では壺を埋置していたが、杯・椀などの食器類を置くこともある。例2のような形で出土することは希少な例で、多くは認識できないで掘り下げられている。例3では、壺類が多く皿椀などは少ないかと思われる。例2の場合、最下層でも壺と銭貨を置いた埋井作法が行われていた様子が窺える。

水溜に土器を置く（図2） 井戸底に据え置くタイプであるが、水溜が設置されている井戸の場合を設定してみた。

例4 兵庫県・猪名庄遺跡SE16<sup>(6)</sup>は、方形の掘形（一辺1.5m、深さ0.4m）で、方形木組の井戸枠で内法は0.8mである。この井戸は曲物の水溜が設置されている。出土した土器3点（図2-1~3）はいずれも土師器皿で、うち2点は水溜の上位に、残る1点は完全に埋まった時点で、いずれも上に向けて据えられていた。出土した土器は8世紀後半~末のものである。

例5 京都府・平安京左京八条三坊七町井戸（P404）<sup>(7)</sup>は、円形の掘形（径1.0m、深さ0.7m）で、方形木組の井戸枠で内法は0.6mである。水溜の底には完形の土師器壺（図2-9）とほぼ完形の羽釜（図2-10）が正位で据えられていた。土器の時期は13世紀前後と考えられる。

水溜の施設を持つ井戸でも、水溜を埋めた段階あるいは埋まった時点でまたは埋井の直前の段階、土器を並べ置いたり土器や石を据え置く、といった作法を行っている。例4は水溜の上位に、例5は下位に据えている。

分割して埋める（図3） 何回かに分割して埋めるとき、各段階で主として土器をまとめて納入する。瓦・石も混じっている場合もある。

例6 福岡県・松本遺跡2号井戸<sup>(8)</sup>は、長円形の掘形（径1.05

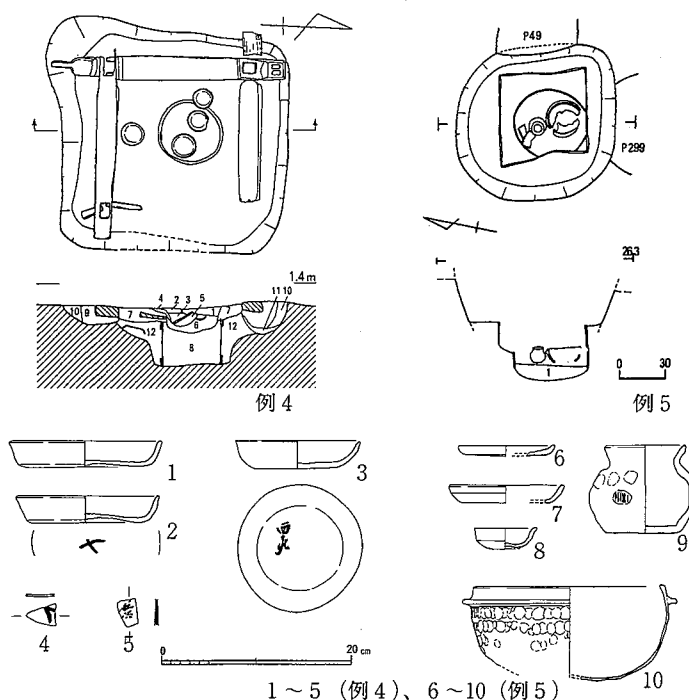


図2 土器を入れた井戸（2） 遺構（1/50） 遺物（1/8）

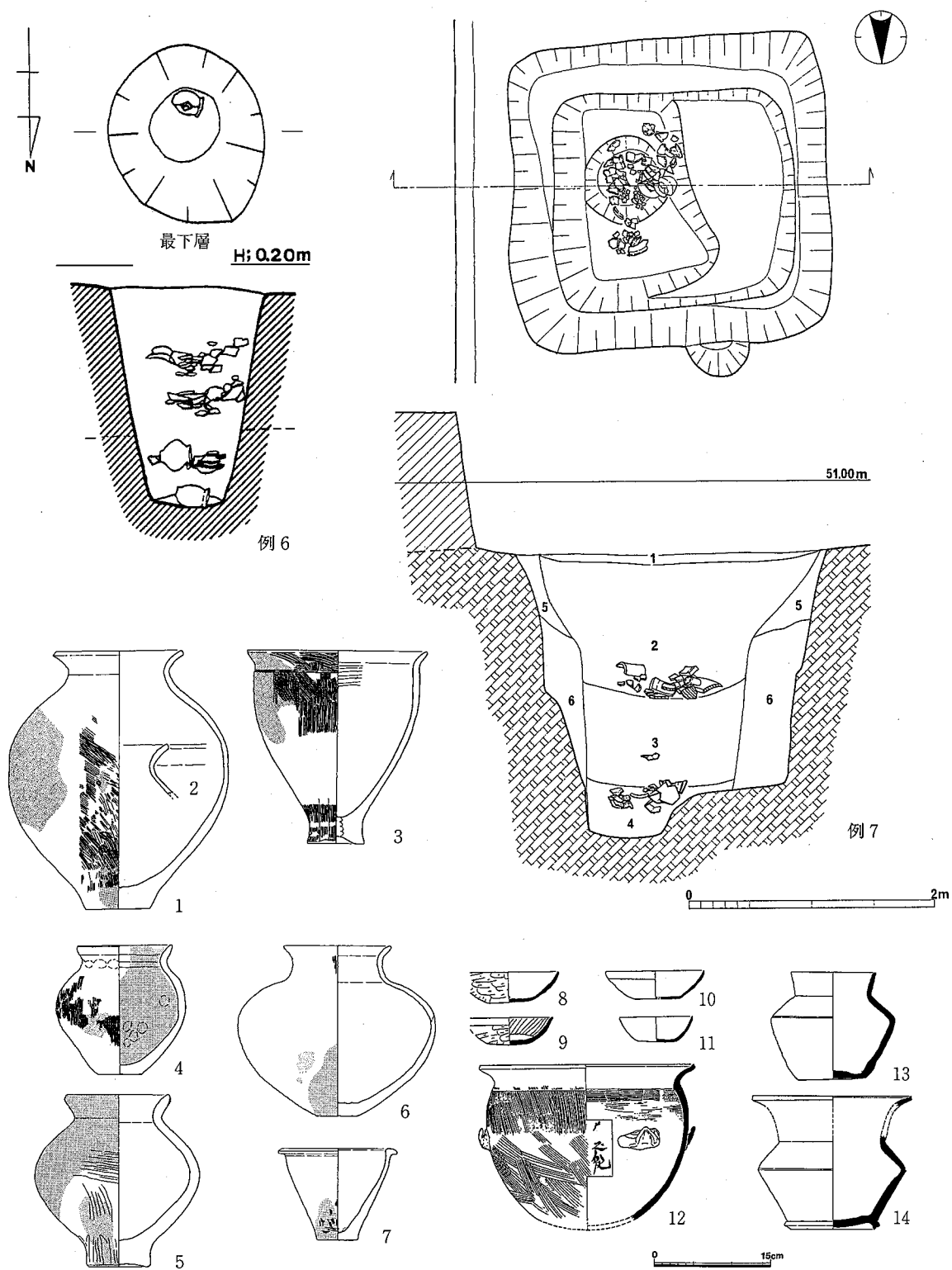
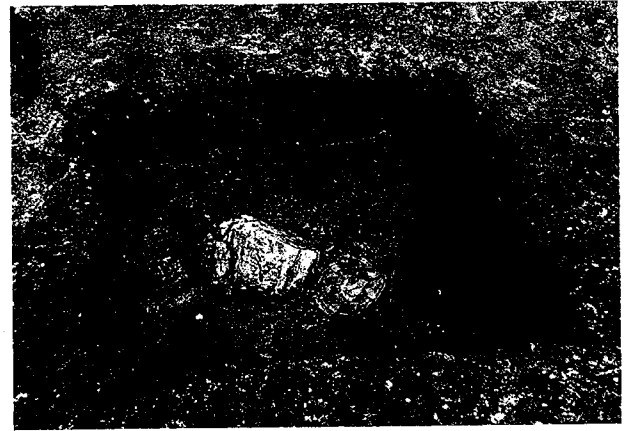
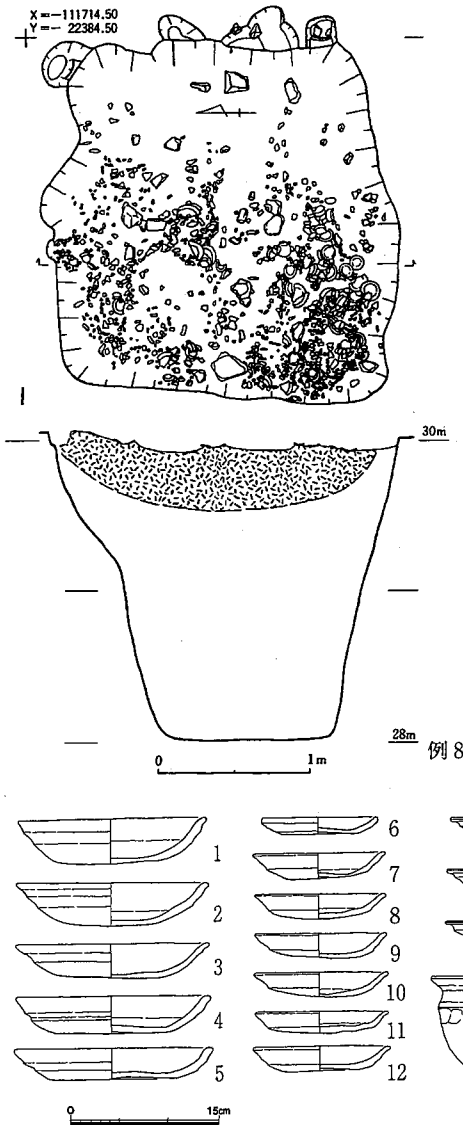


図3 土器を入れた井戸(3) 遺構(1/50) 遺物(1/8)

~1.2m、深さ1.48m)で、素掘井戸である。埋土は暗褐色粘土層の単層であるが、3つのブロックにまとまって遺物(上層…図3-1・2、下層…図3-3)が出土しており、さらに底部(図3-4~7)では完形の壺が横位で見つかっている。土器は弥生時代前期末~中期初頭のものである。



例9 写真：花園大学考古学研究室

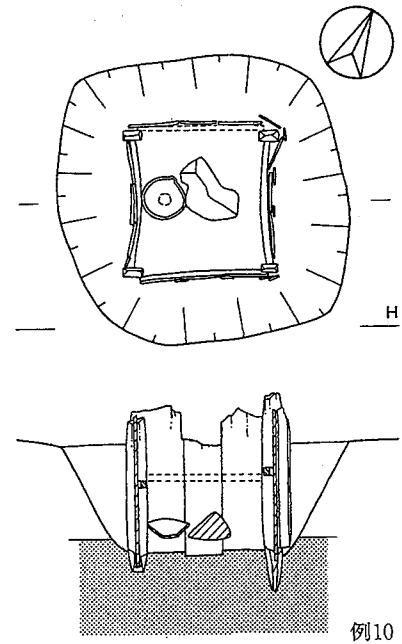


図4 土器を入れた井戸(4) (1/50)

例7 平安京右京一条三坊九町SE60<sup>(9)</sup>は、方形の掘形（一辺2.3～2.6m、深さ1.6m）で、井戸枠は抜き取られていたが、痕跡内には二つのブロックで遺物が出土している（図3-8～14）。土器・瓦は9世紀初頭の様相を示している。

いくつかの単位の層から土器が集中して出土する例が報告されていることがある。すなわち一気に井戸を埋め立てたのではなく、何回かに分割して埋めた様子が見て取れるのである。しかも出土する遺物の時期的な差異は認められないところから、極めて近い時期に埋められたのではないかと推定できる。このような埋め方は、弥生時代から既に行われていた。これを筆者は“分割埋井”と仮称してみたい。

多量の土器で埋める（図4） 井戸内を一杯にするという様な感覚で、土器類を投入するタイプである。井戸内部のある部分に集中していたり、開口部であったりすることもある。

例8 平安京左京六条二坊六町井戸4<sup>(10)</sup>は、不整形の掘形（一辺2.0～2.4m、深さ2.0m）で、掘形からは木枠等の痕跡は認められなかった。また検出面ではほぼ全面に大量の土器（図4-1

～12、平安時代後期)が検出された。土器類は検出面から約40cmの間に特に集中しているが、上層の集中部分の土器と井戸底直上付近出土の土器を比べても特に差異は認められなかった。このことから、井戸を埋め戻すにあたっては、かたわらに多量の土器を用意し、ある深さまで土を埋めた後に土器を投入し、さらに土をかぶせる、といった行為がなされたように思われる。

先に挙げた例2の矢倉口遺跡SE05およびSE06も土師器杯が90～120点以上の土器を入れている。この例では土器を大量に用いているが<sup>(11)</sup>、石を井戸の上部に敷き詰めるのと同様の趣旨で埋める方法を採用しているものと解釈できる。

大石と土器を併せて納入(図4) 旧稿でも例示していたが、本稿でも改めて挙げてみることにする。

例9 平安京右京二条三坊九町SE01<sup>(12)</sup>は、検出時3～4mで隅丸方形の掘形をもち、深さは3.4mを測る井戸である。井戸枠は2.3m残存しており、一辺0.9mを測る縦板横棧どめ型式の井戸である。底から1.3mのところ土師器皿が口縁部を合口にして3枚重なった状態で出土している。また同程度のレベルで土師器皿に並べ置くように表面積の多い面を上にして人頭大の大石を据えた状態で検出した。出土した土器から(図4-13～16)10世紀中頃に埋められたのであろう。

例10 広島県・草戸千軒町遺跡SE2171<sup>(13)</sup>は、隅丸方形の掘形(一辺1.85m、深さ1.3m)で、井側の中央部に底から10cm程度浮いたところで、45cm大の石とともに播鉢を上向きにして据えているのを確認しており、同種の意図であると考えられる。本例は当初は底部に据えていたものであろう。埋まった時期は13世紀後半である。

ほかに猪名庄遺跡SE15では、上に向けた土師器皿1点と焼けた石(長辺15cm)を併置していた。

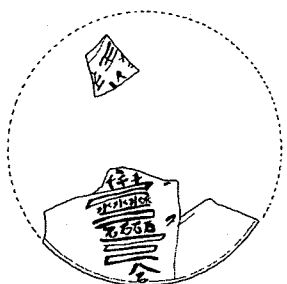
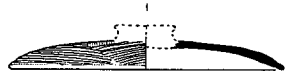
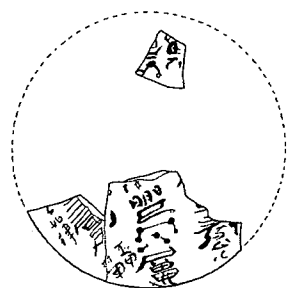
掘形に入れる ここから出土する土器の多くは混入品である。近年、意図的な埋納も報告されているようだが、もう少し事例の増加を待ちたい。

### 3 出土する土器の形態

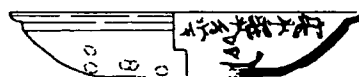
墨書する土器(図5) 墨書土器は比較的多い出土量である。墨書には、文字・絵画・記号・呪符など様々である。このうち本稿と関連する資料を挙げてみる。

例11 奈良県・平城京右京八条一坊十一坪SE930<sup>(14)</sup>は、長方形の掘形(辺長3.6～4.0m、深さ3.5m)で、当初は横板組隅柱で、後に縦板組横棧井戸に継ぎ足している。井戸枠内の下層(奈良時代前半)から、呪符を内外面に墨書する土師器蓋が出土している。この呪符の目的とするところは判明していないが、呪句の中に「急々如律令」「水」「石」などの語句が垣間見られる。

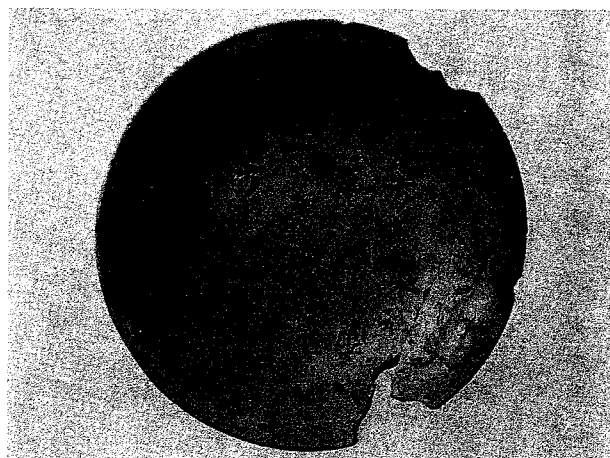
例12 平安京右京二条三坊十六町SE401<sup>(15)</sup>は、別の井戸に切られる形で検出している。そのため検出時の掘形の形状は不明だが2.6mを測る。検出面より約1.8mは大きく掘り込まれており、その下から井戸枠を検出している。井戸枠の一辺0.9mを測る縦板組井戸である。この井戸の最下層から墨書を施した土師器杯が出土している。墨書は内面にあり、中央に「隠経」周縁部に「宅水宅水干水干」と読み取ることが出来る。この土器は10世紀に位置づけられるものである。



例11



例12



例113 写真：高槻市教育委員会

図5 井戸から出土した土器 (1/4)

例13 大阪府・嶋上郡衙跡<sup>(16)</sup>の調査で、方形石組の井戸（掘形3～3.4m、深さ3.4m、内径0.8～1.5m）を検出している。遺物は黒色土器・燈明皿・土鍋等の土器類と、曲物片・櫛片・斎串等の木製品類が検出された。なかでも井戸底から2点の墨書土器は、ほとんど底に近いところから検出され、どちらもほぼ完形に近い。底部内面に5行の墨書があり、それぞれ左から「中史（央）土公水神王」・「西方土公水神王」・「東方土公水神王」・「南方土□水神王」・「北方土公天神王」とよめる。時期は、黒色土器からみて、平安時代中頃に比定できる。

このほかにも奈良県・橿原遺跡<sup>(17)</sup>では「神」「龍」などを墨書する土器の出土があったようである。しかし、人面墨書土器の出土例は、非常に少ないと言える。

大型の土器（図6） 大型の土器（片）は井戸枠として用いる例が多いが、内容物としては少ないといえる。

例14 大阪府・野々上遺跡<sup>(18)</sup>で検出された井戸は一辺0.9mを測る横板井籠組の井戸跡である。この井戸は、廃絶時に井戸掘形の上部を径2.4～2.5mの土坑状に掘り込み、そこに須恵器の大甕を据えていた。大甕の中からは、この大甕の口縁部をはじめ土師器の杯・皿・壺の他、瓦、灰釉陶器が出土した。出土した土師器の杯には、穿孔しているものが1点ある。井戸枠の上半部は既に抜き取られており、下半部では井戸枠が遺存していたが、その底付近からほぼ完形の土師器の甕が6点出土した。いずれも口縁部を上に向け、並べられた状況の出土であった。また、数十点

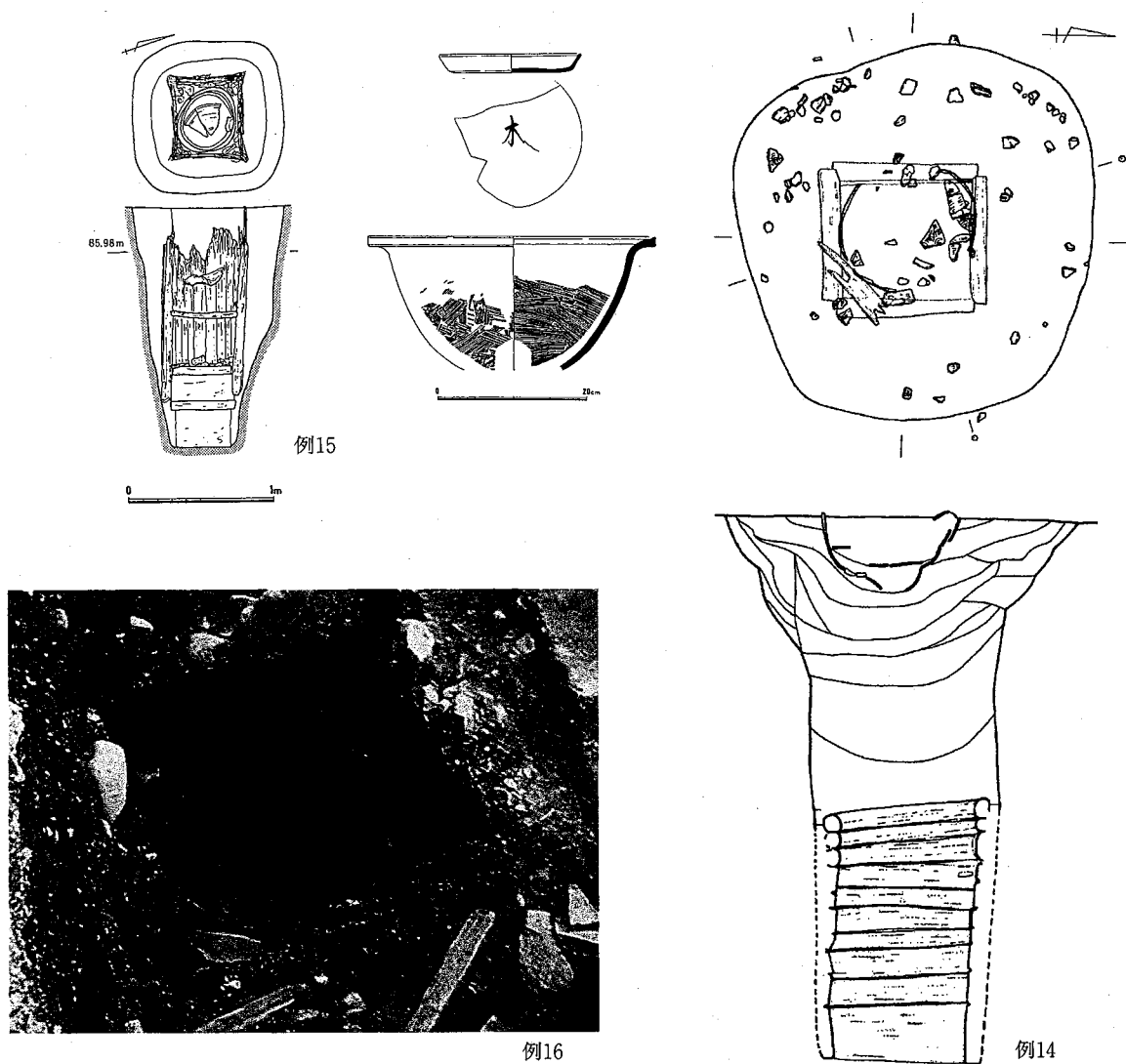


図6 土器を入れた井戸 (5) 例14は原図を改変 遺構 (1/50) 遺物 (1/4)

の桃の種が認められた。検出した井戸から豊富な遺物が出土し、土器から8世紀後半の時期に比定される。

例15 滋賀県・西河原森ノ内遺跡<sup>(19)</sup>SE19103は、方形の掘形（一辺1.05m、深さ1.6m）で、縦板組横棧どめ型式の井戸で、径0.34~0.4mの曲物2段で水溜としている。検出面から0.4mで長軸28cmの須恵器鉢片（図6-2）が確認できる。また底を穿孔したような須恵器壺も出土している。これらの土器から、井戸が埋まったのは9世紀中~後半であると考えられる。

例16 平安京右京七条二坊十二町<sup>(20)</sup>SE574は内法の一辺1.6m、深さ0.5mを測る縦板組井戸で、底部中央には径1~1.2m、深さ0.5mの円形の曲物を据えて水溜とする。井戸枠内からは通常よく出土する遺物のほかに、水溜と考えられる曲物の上位に、40×50cm程度に打ち欠いた大型の須恵器甕の体部の外面を下にしている状態で出土した。この遺物の時期は10世紀中ごろのものと考えられる。

いずれも井戸枠を塞ぐような形で据えている。例15も明らかに井戸枠を意識した位置関係にあ



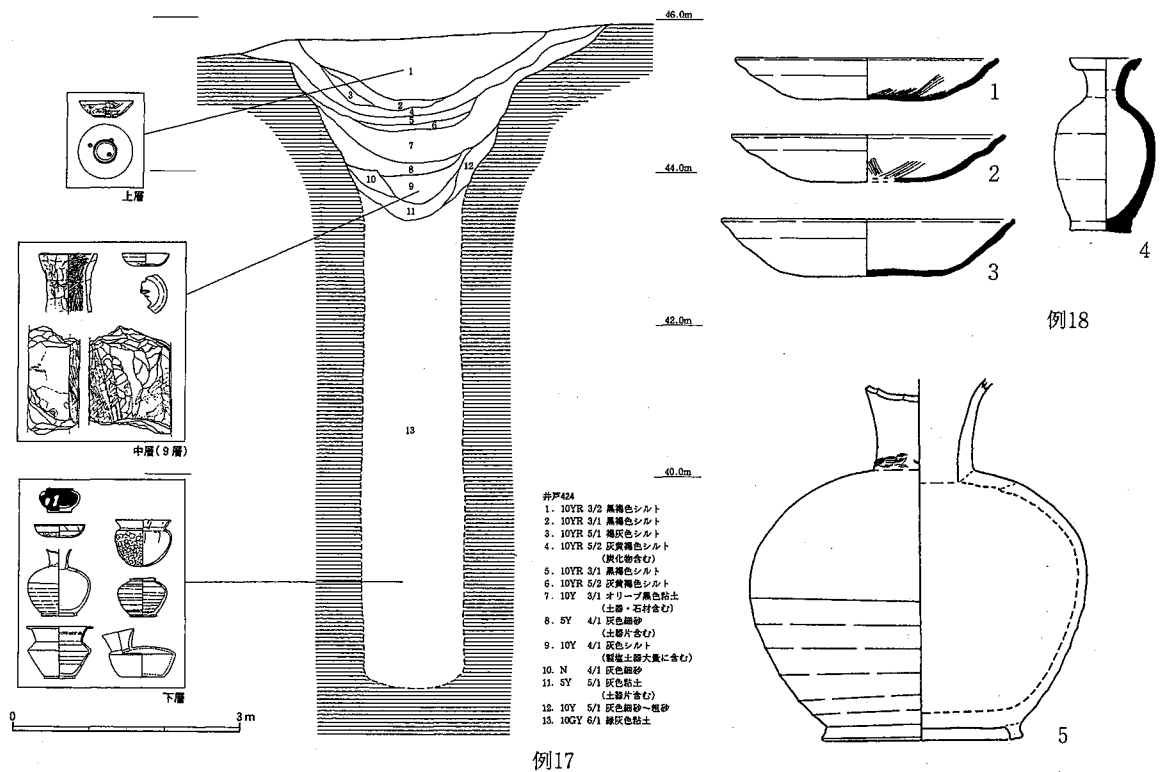


図7 土器を入れた井戸 (6) 例17は原図を改変 遺構 (1/100) 遺物 (1/4)

る。例16は埋井の当初は、最上位に据えていたのかとも推定できる。

打ち欠いた土器 (図7) 井戸からは口縁部を欠いた完形に近い壺・瓶などが出土している例も散見されることがある。

例17 大阪府・駒ヶ谷遺跡<sup>(21)</sup>では口縁部が打ち欠かれている甕・壺が多く出土している。そのなかには頸部に縄を巻いた壺 (図7-5) の出土があったため、釣瓶の可能性が高いという指摘があり蓋然性は高いと言える。しかし何故口縁部をわざわざ打ち欠く必要があるのか? 報文では「打ち欠いて破断面を作ることで頸部から上にのびる紐を固定しようとする意図があったかもしれない」と述べているが、この点について筆者自身はまだ理解できないでいる。検討を要するところである。

例14でも、口縁部が甕内に残っていたことから、意図的な土器の打ち欠きが指摘できる。一方で例16は、井戸枠・水溜の大きさに合わせて打ち欠いたものであることは間違いない。

五穀などを入れた土器 (図7) 小壺などの容器類が、井戸から出土することがしばしば報告されている。ほとんどの例が内部には何もないという報告である。

例18 平安京右京六条二坊二町で検出された平安時代前期の井戸SE31<sup>(22)</sup>は、円形縦板枠の井戸で、径1.2m、深さ2.3mを測る。井戸枠内から土師器 (図7-1~3) ・緑釉陶器と共に、胡麻が詰まった須恵器小壺 (図7-4) が出土している。

草戸千軒町遺跡SE100<sup>(23)</sup>でも、炭化したコメ、ムギ、ソバが井戸枠内から検出されているが、容器には入っていなかったようである。

土器を合口にして納入 報告例は少なく、実測図・写真が掲載されている井戸は少ない<sup>(24)</sup>。

例19 平安京左京二条三坊一町<sup>(25)</sup>の方形井戸の中位に、土師器2枚を合口にした状態で検出されているようである。時期は10世紀前後という。

例20 平安京右京三条二坊十六町<sup>(26)</sup>では、横板組SE104「泉」（一辺1.2m）は苑池の北辺に位置し、底の砂礫層から地下水が湧きだす構造である。内部には大型の人形があり、さらにその上位に10世紀後半の土師器皿を合口にした状態で検出されている。

例21 橿原遺跡（昭和13年調査<sup>(27)</sup>）の第19号井は縦板組横棧どめ型式で、下段に横板組があるがこれは水溜かと思われる。水溜の中位には土師器皿を合口にした状態で2組発見されている。銭貨（延喜通宝）も同時に出土する。

先述しているが、例9でも10世紀前後の土師器皿3枚を合口にした状態で検出されている。

#### 4 検討

井戸に土器を入れる例を、土器が入っていた位置、土器の大きさ、土器の数量などによって分類すると、次のようになるであろう。

出土部位 大雑把に上層・中層・下層という位置関係を設定してみる。このうち、上層とは検出面近くである。また井戸の調査で、時に土坑状の掘込が、井戸の上層遺構のような形で検出されることがある。これは井戸の最終機能として意義付けられるかと思うので、井戸の一部として扱っても良いのではないかと考えている<sup>(28)</sup>。そのため、井戸の上部土坑とし、そこから出土の土器も井戸に関連するものとして取り扱うこととする。下層とは井戸底に接しているか、その付近または水溜内からの出土をさして言う。中層はそれ以外の部位とする。

上層から出土する例では、土坑状掘込内からの場合が目につき、多くは塵芥処理坑として意義付けられている。しかし例1の野々上遺跡のように、井戸本体が埋められた後、新たに掘り窪められたか、あるいは遺物が追加して埋置されたものであることは断面観察からも明らかである。そしてその時期的な差異はほとんど無く、近接していることが一般的に確認されている。土坑状掘込がない場合も、一定の向きに揃えていたり大きな土器（片）を置いているなど、遺物の出土状況から意図的に埋置したと認識できる事例も報告されている。

中層から出土する例では、例2矢倉口遺跡を代表例としてみた。これは一定期間開口したまま放置された後、新たに埋める段階で納入されたものと考えられる。このような形で検出・報告されることはあまり多くない。多くは乱雑な状態で土器が出土している。そのため調査時では、とくに意図が見出せないことが多い。まだ水が多量に有るときに埋め立てたため、土砂と水が攪拌されて「乱雑」な様相を呈し、その結果この類型に属することがあるかもしれない。

ただ「合口」では井戸の中位に入れていることが多いようである。検出事例が少ないため、結論づけることが出来ないが、興味深い現象である。

下層から出土する例では、埋井時の攪拌によって倒置した状態もある。また土圧により壊れてしまっていることが多いが、復元の結果完形品であった事例も認められる。そして同一方向に掘

え置くことが多いところから、投棄したと見做すより意図的な所作を見ることが出来る<sup>(29)</sup>。




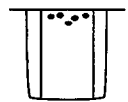
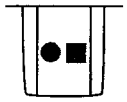
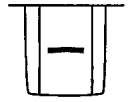
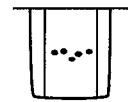
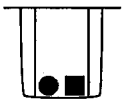
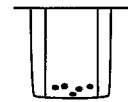
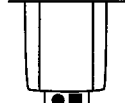
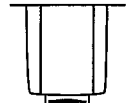
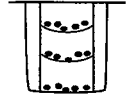
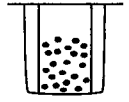

“分割埋井”は先の分類では上・中・下の各層に位置するものであるが、この点について森貞次郎氏が「井戸に壺を主とする土器を沈めることは、井戸水を対象とした信仰にもとづく祭祀が行われたことによると考えられる。(中略)多くは井戸の埋土の途中で三～四回にわたって土器群を投入している状態であるが年代差は見出せない。井戸を廃棄して埋め戻すときに行った呪術的儀礼ではなかったか<sup>(30)</sup>」とも述べている。何れも同様の意図が想定できる場所であるが、弥生時代と平安時代とでは時間差が大きく、それぞれを直接結びつけることは出来ないが、埋井に関わる一方法として捉えることが出来るのではないであろうか。

これらを模式図で表すと、表1の如くなるであろう。

土器の大きさ 井戸から出土する土器、とくに埋井に伴って出土する土器は、ほとんどが日常使用していたかと思われる、通有の大きさのものである。その多くは、とくに何の加工もせず投入しているが、なかには土器の体部や底部に穿孔を施していたり、壺などの頸部を打ち欠いている場合もある。いわゆる祭祀遺物と云われている小型(ミニチュア)土器は、皆無ではないが非常に少ない出土量である。

表1 土器出土位置模式図

大型の土器を井戸枠の部材として利用しているのは、比較的よく見られる現象である。土器の種類も円筒埴輪、陶器甕、瓦器羽釜などがあり、古代から中近世に至るまで認められる。しかし埋立に伴った状態で、大型の土器が井戸から出土するのは、あまり多くないと言える。しかも完形の土器が出土することはなく、発見された例ではいずれも打ち欠いた状態である。羽曳野市の例14でも、大甕の口縁部が、検出された甕の底で発見されているとの報告があるため、当初から意図して打ち欠いた状態で埋納したものであると見てよい。平安京の例16でも、据え付けた甕が水溜の径に合わせて打ち欠いた状

位置		数量	I (1~数点)	II (大きな破片)	III (多量)	備考
A (上位)	1 (上部土坑あり)					
	2 (上部土坑なし)					上部に1~数点の土器を据えている例の報告なし。
B (中位)						
C (下位)	1 (水溜あり)					底に大型土器(片)を入れる例は現段階では報告なし。
	2 (水溜なし)					水溜に多量の土器を入れることも考えられるが、報告例なし。
Z (その他)						

※B、C、Zは上部土坑の存在については問わない。

態で検出されているところからも、意図的に打ち欠いて埋めたものであるといっても差し支えないであろう。

一方で‘打ち欠く’ということに関して、例17を遡って、弥生中期末から後期初頭で口縁を欠いた壺を納入する例がある。森氏は先の論稿で「井戸を廃棄して埋め戻すときに行った呪術的儀礼ではなかったかと思われるのは、丹塗磨研の壺形土器が大部分で、しかも完形品あるいは口縁部を欠いた完形に近いものが大部分であることである。これらの土器が井戸を対象とした祭祀に用いられておったものであることは、まず間違いあるまい。」と述べており、こうした形で井戸に入れる埋井法はかなり長い期間行われていたかと思われる。

**種類・数量・組合せ** 納入される土器の種類は、甕・壺・瓶類（容器）と皿・杯・椀（食器）の類のグループに分類することが出来る。出土する土器は日常使用する物のほとんどの種類があり、完形あるいはそれに近い遺物である。これらが単体で出土する場合もあれば、数点・多数といった数量で出土することもある。ただ数点以内というのが多くを占める傾向である。単体あるいは数点以内で出土するのは、容器類が多く、食器類の場合は多量に納入されていたケースが多い。そして両者を組み合わせるような形での土器の出土は現時点では認められない。石と土器をセットで納入する例が認められるが、鎮井と慰撫とを兼ねあわせたものであろうか。

**構造から** 素掘あるいは枠を抜き取った井戸や、木組井戸に関しては何れのタイプでも執行されていた。井戸枠内に土器を納入する方法と、上部土坑に土器を納入する方法とを比較すると前者の検出例が多い。石組井戸に関しては、木組井戸に比べてかなり少ないといえる。水溜の有無からは、特別に指摘できるような傾向は認められない、

**時期による変移** 埋井時に土器を納入する事例は、全体的な流れとしては弥生時代には既に行われており、中世までは確実に行われていた形跡がある。検出数からは室町時代になると減少してきており、先述の構造の変化に伴うものであるのか。そして、近世になるとほとんどその例を見ないようである。

弥生～古墳時代では、井戸の底部に土器類を並べ置く埋井型式が主流である。出土する土器には、壺・甕などの容器タイプの土器を埋納することが多い。

奈良～平安時代になると、埋井型式も多様性を示すようになってくる。その一つは、上部に土坑状の掘込を穿つことである。この掘込の底部あるいは上部に、土器を据え置く様子が見てとれる。壺・甕などを井戸底に据え置く方式もこの頃まで行われていた。また弥生時代からあった、分割埋井はまだこのころでも行われていた。杯・皿類を大量に入れる方法も、平安時代には行われるようになってきた。

鎌倉～室町時代では、宗教の時代と言われるように、多くの宗教関連遺構や遺物の検出を見る。しかし井戸に石を入れる例は多いにも関わらず、土器を入れることに関しては、減少してきているように思われる。

江戸時代になると、井戸に土器を埋置することは、さらに減少してくる。ただし、その最終の時期はまだ特定することは出来ない。それに代わって「竹」を挿入する埋井型式が盛行する。

目的がわかる？ 例11の呪符を書く土器は、おそらく道教に基づくものであろう。その内容が判然としないため、目的などについては確定できないが、呪句の中に「急急如律令」「水」「石」の語句があるため、(井戸の)水に関する祈願であったかと思われる。

例12では、土師器皿の中央に「隠経」と書かれており、周縁部には「宅水宅水干水干」と‘水’という文字が頻繁に書かれている。このため、井戸と深く関わっていたことを物語っている。しかし「隠経」が如何なるものか判然としないため、どのような目的で書かれて納入されたのか課題となる。

例13の調査で出土した墨書土器は、藤沢一夫氏によると、井戸を新しく構築した際に、水に住む神を祀ってその怒りを鎮め、井戸の水が枯れないように祈念する祭祀に用いられたものとされ、陰陽五行説から導かれるものと説いている<sup>(31)</sup>。

土器を合口にすることについては、『宇治拾遺物語(巻14)』に「土器を合口にして土中に入れて呪詛を行っていた」旨の記事がある。本例もそれに類するのではないかと推定できるが、まだその域を出ることはない。出土状況から、鎮井を目的としたと考えても良いであろう。なかには紐で結んだ痕跡が認められる土器もある。

## 5 なぜ土器を入れるのか？

井戸における土器投入は、まず第一に井戸は不要になった土器の投棄のための施設としての役割が付与される。しかし今まで見てきたような例を検討するとき、必ずしもそうではなく意図的な様相が認められることがある。そこには2(土器を納入する形態)で挙げた事例が、井戸の廃棄に伴って為された埋井に関する主な痕跡であろう。もとよりこれらで全ての事例とは考えてはいないが、大方の傾向を占めているものと思われる。こうした事例から、どのような意識を以て行われたのか検討してみたい。

供物の容器としての土器埋納 例3は底部で出土したすべての土器が正位で検出されている。このことは意図的にそして埋井の直前に土器を据え置いた結果であろうということは、簡単に理解できるものである。土器の器種として平安時代以前では、甕、壺、瓶などが頻出している。横位や逆位で検出されている例でも、埋置した当初は正位で据え置いていたもの、と推定することが可能である。

このようにして出土した土器は、本来はただ置くだけという訳ではなかったであろう。井戸に関する祭礼を行った前後に据えたものと解することが出来るが、土器の中には何が入っていたのかほとんど報告はない。ただ例18の調査では、井戸内から須恵器小壺が出土しており、その中には胡麻が詰まっていたことが報告されている。こうした土器の検出から、同様に五穀などが中に入れられていた可能性が指摘できる。あるいは酒類が入れられていたのでしょうか？皿類が置かれている場合も、当初は何かが供物として、置かれていたのではないかと考えられる。あえて想像をたくましくすると、(邪気を払うという)桃種(核)が見つかったとき、その可能性を指摘することが出来る。

何故大量の土器を入れるのか？ 平安時代以降になると井戸に限らず、大量にというより遺構いっばいに土器層とでも言うべき状況で出土する事例が、しばしば報告されている。その様子については、一定程度の時間を費やして埋まっていったことが理解できる場合と、一気に埋まったよう<sup>(32)</sup>で出土する遺物にほとんど時期差が認められない場合とがある。前者については堆積状況にもよるが、主として投棄、廃棄、流入の結果ではないかと考えられる。後者に関しては、前者と重複する側面があるが、同じ方向に向けた状態であればベストである。

このように大量に土器を入れるのは、呪力や願事をより効果的に実現させるために、量でものを言わせるようになってきたためではないだろうか。この現象は仏教でも同様で、千体仏・大仏の造立も同様の趣旨であったと考えている。

土器は石の代替か？ 例8や例15、16は、筆者が別稿<sup>(32)</sup>で紹介した「井戸に石を入れる」埋井法“グリ石を開口部に入れる”“大石を井戸枠内に入れる”と類似していることが理解できるであろう。石を入れることと土器を入れることの前後関係については、結論づけることは出来ないが、混在していたのではないかと考えている。しかし、上部土坑の底部あるいはいったん中位まで埋まった井戸を、再び埋めるときに完形の土器が正位で置かれているが、それに代わる意味での石の埋置は認められない。つまり大きな土器（片）を石の代用としたような埋納が認められる。同様に例8も、グリ石と同じ役割を与えていたのではないと思われる。ここから出土する土器も、やはり拳大程度の大きさを基本としているようである。そしてそこには「井戸に蓋をする」という考え方の延長線上にあるとの認識があったのであろう。

土器が神性を帯びるのか？ 弥生時代には朱を塗った土器を入れている例がある。意図的に口縁部を打ち欠いたり、穿孔を施した土器を入れている例もある。時には呪句を書いた土器がある。このような土器については、何らかの祭祀儀礼にともなうものとの認識がある。つまり、朱を塗ることによって邪気を払うことが出来る。これは古墳の主体部にしばしば朱が認められることと関連する現象であろう。土器の一部を壊すのは神が再び井戸に宿らないように、という意味があったのだろうか。こうした事象は「土器が神性を持っていた」のではなく、井戸そのものあるいは深い穴に畏怖を感じ、高じてはそのような穴に神性が付与されたり神の拠り所となる。そこへ伝達手段として、土器が用いられた結果ではないかと考えられないだろうか。

## 6 おわりに

今まで見てきたように、塵芥処理坑としての利用形態以外で、土器が出土する形態や出土した土器を検討したとき、埋井に際して何らかの意志が垣間見られるかと思われる。単一のみならず複合した形で検出されることが多いが、土器を入れる基本パターンから、以下のような類型が考えられるであろう。

①井戸（神）に奉獻する…廃棄時に感謝の意味を込めて埋納した。出土部位は、主として下層に入れる例が多く、次いで上層に埋置することが多い。

本稿の〔井戸底に土器を据え置く〕〔水溜の直上に土器を置く〕〔大石と土器を併せて納入〕

〔五穀を入れた土器を納入〕が、これに該当する。

②井戸（神）を介して祈願する…こういった意図が認められる場合、井戸が使用されているときに行っていたと考えるのが自然である。この種の例には、土器だけではなく、木簡、人形などに託して書いたものもある。

本稿の〔墨書する土器を納入〕がこれに該当し、呪句などを書いている。検出例はまだ無いが、具体的な願文、経文を書くものがあると思われる。

③蓋をする…「封」をすることは、井戸（神）に対して、強固な意志で以て対峙する姿勢かと思われる。そこで井戸（神）にある程度の融通性を持たせるため、逃げ道を想定していたのではないだろうか。当初は石を入れたもので、その様式を模して土器を入れるようになった方法であろう。

本稿の〔大型の土器（片）を据える〕〔多量の土器で埋める〕〔何回かに分割して埋めるときに置く〕が、これに該当する。

④その他…〔土器を合口にして納入〕する、〔打ち欠いた土器〕や彩色を施した土器などの納入は、祭祀を行っていたことを予想させる行為である。

井戸に土器を入れるという行為には、このような類型・思惟が認められることが多い。そしてまた、“なぜ土器が入れられたのか？”についても、石の代替であるように見えるし、またその逆もあり得ることが確認できた。

土器を井戸に入れる儀礼は弥生時代から連綿と続いているが、江戸時代になってくると、その痕跡はほとんど途絶えてしまう。しかも、埋井そのものが単純化されてくるように思われるのである。この点について論考する余地はないが、生活様式、経済の変化に伴って意識の変化があったのではないかと考えている。もう一点、構造的に強固になった石組井戸が主流になったことによって木材の腐食に伴う崩壊の危険性が減少したことも見逃せないであろう。

末筆であるが、高槻市教育委員会、花園大学考古学研究室、(財)京都市埋蔵文化財研究所の同僚諸氏に御世話になったことを申し添えておきます。また資料収集に当たっては、愚息陽太郎の協力を得た。

#### 註・参考文献

- (1) 事例数の比率としては、検出井戸全体からすれば、1～2割内外であるかと推定している。
- (2) 日色四郎『日本上代井の研究』（日色四郎先生遺稿出版会 1967年）から引用
- (3) 『富津市川島遺跡—一般国道465号埋蔵文化財調査報告書—』千葉県文化財センター調査報告書第339集 千葉県土木部・(財)千葉県文化財センター 1998年
- (4) 『矢倉口遺跡発掘調査報告書—国道1号線京滋バイパス関連遺跡発掘調査報告書第3冊—』滋賀県教育委員会・草津市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1987年
- (5) 『内里八丁遺跡—第二京阪道路建設に伴う京都府八幡市所在遺跡の調査』京都文化博物館調査研究報告第13集 京都府京都文化博物館 1998年

- (6) 『猪名庄遺跡－第31次調査（JR尼崎駅北市街地再開発事業に伴う）発掘調査』（尼崎市文化財調査報告第28集） 尼崎市教育委員会 1999年
- (7) 『平安京左京八条三坊七町－京都市下京区東塩小路町－』京都文化博物館（仮称）調査研究報告第1集（財）京都文化財団 1988年
- (8) 『永犬丸遺跡群2（八反田遺跡、松本遺跡、永犬丸遺跡）－北九州市永犬丸・則松土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告2－』北九州市埋蔵文化財調査報告第216集 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1998年
- (9) 『埋蔵文化財発掘調査概報（1980－3）』京都府教育委員会 1980年
- (10) 『平安京左京六条二坊六町－平安京跡研究調査報告第17輯－』（財）古代学協会 1996年
- (11) 当初は完形の土器が納入されていたものが、土圧などによって土器片が層状に堆積した場合も考えられる。
- (12) 『花園大学構内調査報告VI（付 妙心寺庫裡修理に伴う事前調査）－京都市中京区西ノ京壺の内町（平安京右京2条3坊9町）－』花大考研報告11 花園大学考古学研究室 1998年
- (13) 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告II－北部地域南半部の調査－』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1994年
- (14) 『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』 奈良国立文化財研究所 1984年
- (15) 『花園大学構内調査報告V－京都市右京区花園春日町・ハツ口町（平安京右京2条3坊15・16町）－』花大考研報告12 花園大学考古学研究室 1998年
- (16) 『嶋上郡衙跡発掘調査概要・5－高槻市郡家本町・郡家新町・清福寺町・川西町・今城町所在－』高槻市教育委員会 1981年
- (17) 註2に同じ
- (18) 『野々上I－野々上遺跡試掘調査報告書－』羽曳野市遺跡調査会 1994年
- (19) 『平成6年度 中主町埋蔵文化財発掘調査集報I』中主町文化財調査報告書第45集 滋賀県野洲郡中主町教育委員会 1995年
- (20) 南出俊彦「平安京右京七条二坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- (21) 『駒ヶ谷遺跡－南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書－』（財）大阪府文化財調査研究センター 1999年
- (22) 網伸也「平安京右京六条二坊1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- (23) 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告III－南部地域北半部の調査－』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1995年
- (24) 例13の嶋上郡衙跡では、井戸出土の土師器皿も2つの皿を合口にして紐で結え、井戸に沈めたものと考えられている。
- (25) 古代文化調査会（家崎孝治氏代表）による教示



- (26) 『平安京右京三条二坊十六町発掘調査現地説明会資料』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年、鈴木廣司氏による教示
- (27) 註2に同じ
- (28) 久世康博「井戸はどうして埋められたのか(序論)」『近江の歴史と考古』西田弘先生米寿記念論集刊行会 2001年(刊行予定)
- (29) 同様に、〔土器を伏せて納入する〕方法もありうる。たとえば、長岡京左京七条三坊SE263は、曲物の水溜の底部中央に、長岡京期の完形の土師器杯Bが伏せた状態で検出されている。(『水垂遺跡長岡京左京六・七条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊(財)京都市埋蔵文化財研究所1998年)ほかに藤原京藤原宮西方官衙地区で、方形SE7700(一辺1.2m、深さ0.8m)縦板横棧どめ型式の井戸を検出している。その最下層で、小型甕を伏せた状態で検出していることが報告されている。(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報23』奈良国立文化財研究所 1993年)
- 現在確認できているのはこの2例だけであるが、水溜の有無に関わらず検出されている。埋井の当初からそうであったのか、あるいは本来は正位に据えられていたのが埋井の過程で逆転したのか、もう少し検討しなくてはならない。
- (30) 森貞次郎「弥生時代の遺物に現れた信仰の形態」『神道考古学講座』第一巻前神道期 雄山閣 1983年
- (31) 註2に同じ
- (32) 久世康博「井戸はどうして埋められたのか(石を入れる)」『考古学論集』第5集 考古学を学ぶ会 2001年

